



小熊秀雄

被烤熟的鱼

小熊秀雄

(翻译 李轶伦)

一条烤熟了的秋刀鱼躺在白色的盘子上，不禁深深地怀恋起大海。

他想起和同类们在那辽阔宽广的海面畅游，还有以前在茂密的海草中发现的红色珊瑚。那美丽的珊瑚一定长得更高更大了吧。会不会已经被别的鱼发现了呢？回想起在大海中的生活，被烤熟了的秋刀鱼难过地哭了起来。

而最令他牵挂的还是最亲近的父母和兄弟姐妹们。

他被渔夫捕上来以后，和许多秋刀鱼们一起被塞进一个石油筒里，经过了漫长的火车旅途，到达了都市的一家鱼店并被摆到柜台上，才得以重见天日。

那里摆列着各种各样的同类：秋刀鱼、鲷鱼、鲈鱼、章鱼等，甚至有一些平时在大海里都很少见到的鱼，所以他一点都不觉得寂寞。可这里的鱼们

既不能游动，又不能说话，他们的眼睛都退色发白了，像玩具或是生了病一样无聊而悲伤地躺在那里一动不动。

几天之后的今天，这家的妇女把他买了下来。秋刀鱼被烤熟摆在盘子里，就等着她丈夫回来把他吃掉。

盘中的秋刀鱼想：“啊……，好怀念大海呀！好想再看看那碧蓝的海水和那白色的帆船……”他一边想，一边像疯了一样想要拼命摇动身体，却无济于事。他的身体被串在铁条上，而且被烤熟的身体变得轻了许多，尾鳍也完全不听使唤了。

秋刀鱼停止了无谓的挣扎。可他的心中却充满了对大海的眷恋和对家人的怀念之情。

“大花猫，你老这么盯着我干什么？你也体谅一下我留恋大海的心情吧。”秋刀鱼对这家养的花猫说。这只花猫从刚才起就一直贪婪地向这边左顾右盼。

花猫喉咙里发出呼噜呼噜的响声，他走近秋刀鱼，不停地抽动着鼻子说：“这是因为你看上去实在太诱人了呀。”

秋刀鱼把他的身世告诉了花猫，并求花猫帮忙把自己带回大海。花猫考虑了一会儿说：“那好吧，我就把你送回大海。可你用什么来感谢我呢？”于是，秋刀鱼决定，作为报答花猫的报酬，把猫最喜欢的脸部的肉给他吃。

尽管如此，秋刀鱼一想到能回到大海，高兴地差点儿流出眼泪。

花猫把秋刀鱼叼在口中，趁女主人和女佣人不注意，偷偷地从后门溜出，向着大海逃跑了。可跑到了城外的一座桥上的时候，花猫对秋刀鱼说：“秋刀鱼呀，我饿得实在跑不动了，这样的话我们可到不了那么远的海边。”

秋刀鱼一想到不能回大海，就着急了，说：“那你就把刚才说好的报酬——我脸上的肉先吃了吧。”

可没曾想，花猫把秋刀鱼脸上的肉吃完以后，竟然一溜烟地飞奔而逃了。

秋刀鱼难过得不得了，可也没有任何办法，只好在这里继续等好心人路过，试着求他们把自己送回大海。可是，在这么偏僻的桥头上连个人影也没有，天渐渐黑下来了。

第二天清早，幸好有一只早起的老鼠路过，秋刀鱼便向他求救。

可老鼠说：“这事儿我可办不了。路那么远，而且我连早饭都没吃呢。”秋刀鱼听他这么说，便决定把身上一侧的肉给老鼠吃，以此作为送他回到大海的报酬。

人于是，秋刀鱼身体一侧的肉便进了老鼠的肚中。之后，老鼠把自己的长尾巴系在秋刀鱼身上，拖着他向大海跑去。傍晚，他们来到了宽阔的原野上，老鼠对秋刀鱼说：“看来以我的力量，是不可能把你带到大海了。”说完，他就把秋刀鱼丢在原野中，头也不回地逃跑了。

秋刀鱼悲伤极了。

第二天清早，又来了一只骨瘦如柴的野狗，秋刀鱼便向他哀求把自己送回大海。

野狗不怀好意地盯着秋刀鱼说：“我两天都没吃东西了，光是走路都打晃儿，你还让我带你去那么远的大海？嗯……，不过，还是可以商量的，只要你出个好条件，我也可以帮帮你。”于是，秋刀鱼同意把剩下的一侧肉给野狗吃，以此作为带自己回大海的条件。

野狗狼吞虎咽地把鱼肉吃完以后，就叼起秋刀鱼向着大海的方向跑去了。

野狗虽然腿很细，但跑起来可不慢，不久就跑了很远的一段路。可到了一片茂密的杉树林时，野狗就扔下了秋刀鱼逃跑了。

秋刀鱼难过得欲哭无泪。他脸上的肉被猫吃了，身体两侧的肉也被老鼠和野狗吃得干干净净，只剩下了一身的鱼骨头，这下就算有人路过也没有东西可请求人家带自己回大海了。这一天，他在森林里睡着了。半夜下起雨来，只剩下骨架的秋刀鱼冷极了。

第二天，一只乌鸦路过这里，秋刀鱼连忙向他呼救：

“乌鸦先生，求求你帮帮我，带我回大海行吗？”可是乌鸦并没有理他。

秋刀鱼又急着说：“我的背上还有一点肉，虽然少了点儿，不过我愿意送给你。”

乌鸦没好气儿地回答：“那么点儿肉可不够。”秋刀鱼又可怜巴巴地说：“那

我把我最重要的眼珠也送给你好吗？除此之外我实在是什么都没有了。”乌鸦听罢就把秋刀鱼的两个眼珠啄了出来。而鱼眼珠已经枯干，根本没有什么可吃的地方，乌鸦打算把它做成项链，就收在了口袋里。然后，又把鱼身上剩下的肉星啄了个干净。

可秋刀鱼已经是吃剩下的了，全身也没有多少可作为酬谢乌鸦的肉。

乌鸦把鱼骨抓在有力的爪中，向着大海飞去了。

飞了一段时间，乌鸦却突然松开了爪子，扔下秋刀鱼自己向远方飞走了。秋刀鱼掉在了长满青草的山冈上，幸好没有受伤，可他难过极了。

“啊……，好怀念大海呀！好想再看看那碧蓝的海水和那白色的帆船……”。躺在山冈上的秋刀鱼一遍又一遍地念叨着。正在这时，他忽然无意中听到了山冈下传来了浪涛拍打海岸的声音。“哗啦，哗啦……”，这是多么熟悉的声音！再仔细一听，他感觉到是潮水越来越近了。

因为自己的眼珠送给了乌鸦，秋刀鱼成了个瞎子，碧蓝的海水和白色的帆船再也看不见了，他只能默默地听着那令人怀念的波涛声。当闻到馥郁的海风和芳香的海草味儿时，秋刀鱼再也忍不住了，在山冈的青草地上潸然泪下。

后来，秋刀鱼每天都听着涛声，孤苦伶仃地生活在山冈上。

离秋刀鱼不远的地方有一座蚂蚁城。有一天，蚂蚁国王的队列经过他身旁时，秋刀鱼向走在队列最后一只蚂蚁诉说了自己的不幸，并请求他们把自己送回大海。蚂蚁兵把这一情况报告给了国王，国王对秋刀鱼深表同情，便马上下令让手下的蚂蚁把他送回大海。

于是，成千上万的蚂蚁工兵、炮兵、运输兵等蜂拥而来，开始搬运秋刀鱼。蚂蚁们的速度虽然没有乌鸦、野狗和老鼠那么快，但他们又热心又卖力，运了几天之后，终于来到了山冈的悬崖边。

山崖下便是湛蓝的大海了。一想到马上就能回到大海，秋刀鱼高兴地眼泪流个不停。他多次深深地向蚂蚁兵们道了谢，就从悬崖上跳入了大海。

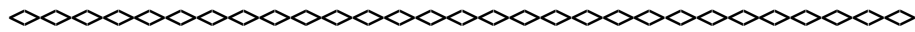
狂喜的秋刀鱼在海中使劲地游了起来，可与以往不同，他感觉身子很重，

好像稍微松一口气就会沉入海底，他只好不停地拼命游动。而且，他觉得海水冰冷刺骨，海水的盐分渗入身体，也让他觉得疼痛难忍。

因为他什么也看不见，只好漫无目的地游着。

过了几天，秋刀鱼被冲上了岸。白沙不断地掩盖到他身上，把他重重地埋在了下面。

波涛的声音随着白沙不断涌来变得越来越弱，渐渐地，那熟悉的声音就再也听不见了。



小熊秀雄 1901年9月9日北海道小樽市の生まれ。高等小学校を卒業後さまざまな仕事を経験し、1922年に旭川新聞社で新聞記者となった。この頃から詩作を始め1928年に上京してからは雑誌社や業界新聞で働きながら、病と貧苦のなかで盛んに詩作を続けた。詩だけではなく童話、評論、絵画といった分野でも才能を発揮した。晩年は漫画出版社中村書店の編集顧問となり原作を担当したSF漫画『火星探検』（1940年）は後世の漫画家やSF作家に影響を与えたとされている。1940年11月20日、肺結核のため亡くなった。

（日本語原文） **焼かれた魚** 小熊秀雄

白い皿の上にとった焼かれたサンマは、たまらなく海が恋しくなりました。

あのひろびろと広がった水面に、たくさんの同類たちと、さまざまな愉快的な遊びをしたことを思い出しました。いつか水底の海草の茂みに見つけておいた、それはきれいな紅色の珊瑚は、あの頃は小さかったけれども、今ではかなり伸びているだろう、それとも誰か他の魚に見つけられてしまったかもしれない、などと焼かれたサンマは、懐かしい海の生活を思い出して、皿の上でさめざめと泣いて

おりました。

ことに、サンマにとって忘れることのできないのは、懐かしい両親と仲のよかつた兄妹達のことでした。

サンマが水から漁師に釣りあげられて、その時一緒に釣られたサンマ達と石油箱¹にぎっしりと詰められたまま、長い長い汽車の旅行をやりました。そしてやっとの思いで、薄暗い箱の中から、明るい都会の魚屋の店先に並ばされました。

そこには海の生活と同じよに、同じ仲間のサンマや鯛や鰈^{かれい}や鰺^{にしん}や鰯^{たこ}や、その他、海でついぞ見かけたことのないような珍しい魚たちまで、にぎやかに並べられていましたので、このサンマは少しも寂しいことはなかったのですが、魚達は泳ぎ廻ることも話しあうこともできず、みな白茶けた瞳をして、人形のように、病気のように、じっと身動きのできない退屈な悲しい境遇にいなければなりませんでした。

それから幾日かたって、この家の奥さまにサンマは買われました。そしていま焼かれました。やがて会社から旦那さまが帰って来るでしょう、そうしたなら食べられてしまわなければなりません。焼かれた魚は、「ああ、海が恋しくなった、青い水が見たくなった、白い帆前船をながめたい」と、気ちがいのようになって皿の上で動こうとしましたが、体のまんなか細い鉄の串が刺してありましてし、それに、焼かれた体が妙に軽くなっていて、なにほど尾鰭^{おひれ}を動かそうとしても、少しも動きませんでした。

それで魚は皿の上であばれることを断念してしまいました。しかしどうかしていま一度あの広々とした海に行って、懐かしい親兄妹に会いたいという気持でいっばいでした。

「ミケちゃんよ、何をそうわたしの顔ばかり、じろじろながめているの。海を恋しい私の心をすこしは察して下さいよ」と魚は、この家の飼い猫のミケちゃんに向かって言いました。

それは猫が先ほどから、横眼でしきりに、焼かれたサンマをながめてばかりいましたからです。

飼い猫のミケちゃんは「実はあまり、サンマさんがおいしそうなのだからですよ」と、猫はごろごろのどを鳴らしながら、サンマの傍に歩いてきて、しきりに鼻をぴくぴくさせました。

魚はいろいろ身の上話をして、自分を海まで連れていってもらうわけにはいくまいかと、飼い猫にむかって相談をいたしました、猫はしばらく考えていましたが「それじゃ、私が海まで連れていってあげましょう、そのかわり何かお礼をいたさなければね」と言いました。そこでサンマは、

報酬として猫に一番おいしい頬の肉をやることを約束して、海まで連れていってもらうことにしました。

焼かれた魚は、海へ帰れると思うと、涙のでるほど嬉しく思いました。

そこで猫は焼いた魚を口にくわえて、奥様や女中さんの知らないまに、そっと裏口から脱けだしました、そしてどンドンと駆け出しました、ちょうど街はずれの橋の上まできましたときに、猫は魚に向かって「サンマさん、腹が減つてとても我慢ができない、これじゃあ、あの遠い海まで行けそうもない」と弱音を吐きだしました。

魚は海へ行けなければ大変と思いましたが「それでは、約束の私の頬の肉をおあがりよ、そして元気をつけてください」と言いました。

猫は魚の頬の肉を食べてしまうと、どンドン後も見ずに逃げてしまいました。

魚はたいへん橋の上で悲しみました、そして誰か親切なものが通ったなら、海まで連れて行ってもらおうと思いましたが、さびしい街はずれの橋の上はなかなか通りませんでした。そしてその日は暮れてしまいました。

翌朝、幸い早起きの若いドブネズミが通りましたので、魚はこのことを頼んで見ました。

ドブネズミは「それはわけのない話だ。しかし道のりもかなりあるし、私もまだ朝飯前だから」と言いましたので、魚は自分の片側の肉を食べさせて、そのかわりに海まで運んでもらう約束をいたしました。

ドブネズミは魚の片側の肉を食べてしまいました。それから魚の胴に長い尻尾

を巻いて引きだしました、その日の夕方にひろい野原につきましたが、ドブネズミは「とても私の力では、あなたを海まで運べそうもありませんから」と言って、魚を野原に捨てて、どんどん逃げて行ってしまいました。

魚はたいへん悲しみました。

その翌朝、いっぴきの痩せこけた野良犬が野原を通りましたので、魚は海まで運んでくださいと頼みました。

野良犬は意地悪そうに、じろりと魚をながめながら「二日も食べ物をたべない野良犬さまが、空身で歩いてからみもひよろひよろするのに、お前さんなどを遠い海までなど運べるものか。しかし相談によっては、運んでやってもよいさ」と言いました。魚はそれでドブネズミに食べられて残った片側の肉を、この野良犬にやって、海まで運んでもらうことにしました。

野良犬は、サンマの片側の肉をおいしそうに食べ終わると、魚の頭のところをくわえて、どんどん海の方角へ駆け出しました。

野良犬は足も細くて駆けることが、なかなか上手でしたから、道は思ったよりもはかどりました。しかし野良犬は、こんもりと茂った杉の森まで来たときに、魚を放りだして逃げてしまいました。

サンマはたいへん悲しみました。それに魚の頬の肉は猫にやり、両側の肉はドブネズミと野良犬にやってしまったので、肉がきれいに食べられて魚の骸骨になっていましたので、こんどは何が通っても、お礼として肉を食べさせて海まで運んでもらうことができなくなりました。その日は森の中に眠りました、夜なかに雨が降ってまいりました。骨ばかりになったサンマはしみじみとその冷たさが身にしみました。

その翌日、一羽のカラスが通りましたので、魚は呼び止めました。

「カラスさん、お願いですからわたしを海まで連れて行ってくれませんか」と頼みましたが、カラスはあまりよい返事をいたしませんでした。

それで魚は背筋のところに、すこしばかり残った肉をあげますからと言いました。

「そればかりの肉じゃ駄目だよ」とカラスは言いましたので、「私の大事な眼玉をあげましょう、もうこれだけより残っていないのですもの」と魚が悲しそうに言いました。それでカラスは魚の眼玉を^{くちばし}嘴で突いて二つ取りだしました。しかし魚の眼玉は、からからに干からびてとても食べられませんでしたが、カラスは首飾りにでもしようと考えましたから、これをもらってポケットにしまいこみました。それから背筋の肉やら、体じゅうの肉という肉を探して、きれいに食べてしまいました。

けれども皆が食べた後ですから、カラスにはいくらかも肉のお礼をやることはできませんでした。

カラスは魚の骨をたくましい手でつかんで、どんどんと海にむかって空を飛びました。

だいぶ来たと思うころ、カラスは不意に魚をつかんでいた手を離して一目散に逃げてしまいました。幸い魚の落ちたところが柔らかい青草の丘の上でしたから、けがをしませんでしたが、魚はたいへん悲しみました。

「ああ、海が恋しくなった、青い水が見たくなった。白い帆前船をながめたい」と、この丘の上でサンマは口癖のように言いました。ふと何心なく耳を傾けますと、この丘の下のあたりで、どうどうという、岸を打つ波の音が聞えるではありませんか。懐かしい懐かしい波の音が、そして遠くのあたりからは賑やかな潮騒がだんだんと近くの方へひびいてきます。

鳥に眼玉をやってしまった魚は、盲目になってしまったので、その懐かしい波の音を聴くばかりで、青い水も白い帆前船もながめ見ることはできませんでした。そして海風の芳しい匂いに混じった海草の香などを嗅ぐと、サンマはたまらなくなって、この青草の丘の上でさめざめと泣き悲しみました。

魚は毎日毎日、丘の上で、海鳴りを聴く苦しい生活をしました。

ある日のこと、魚のいる近くにお城をもっている蟻の王様の行列が、魚のつい近くを長々と通りましたので、魚は行列の最後の方の一匹の蟻の兵隊さんに向かって、自分の身の上を話して海まで連れて行って欲しいと頼んでみました。蟻の

兵隊さんはこのことを王様に申し上げました。蟻の王様はたいへんサンマの身の上に同情をしてくださいました。そして早速承知をして、家来の蟻に海まで運ぶように下知^{げち}をいたしました。

蟻は工兵やら、砲兵やら、輜重兵^{しちようへい}²やら、何千となくやってきて魚を運びだしました、烏や野良犬やドブネズミのように運ぶのに早くはありませんが、それでも親切で熱心に運んでくれましたから、幾日かのち、丘続きの崖のところまで運んでくれました。

この崖の下はすぐまっ青な海になっていました、魚は海に帰れると思うと嬉しさを涙がとめどなく流れました。親切な蟻の兵隊さんになんべんも厚くお礼を言って、魚は崖の上から海に落ちました。

魚は気がいのように水の中を泳ぎ廻りました。前はこんなことがなかったのですが、ともすれば体が重たく水底に沈んでゆきそうになりますので、慌ててさかんに泳ぎ廻りました。それに水が冷めたく痛いほどで、動くたびに水の塩がぴりぴりと激しく体にしみて苦しみました。

その上すこしも眼が見えませんが、どこというあてもなくさまよい歩きました。

それから幾日かたって、魚は岸に打ち上げられました。そして白い砂が体の上に、重たく、たくさん、しだいに重なり、やがて魚の骨は砂の中に埋もれてしまいました。

最初は魚は頭上に波の響きを聴くことができましたが、砂はだんだんと重なり、やがてその懐かしい波の音も、聴くことができなくなりました

1 石油箱……石油缶を入れるのに用いた木製の箱

2 輜重兵……軍隊の糧食、被服、武器、弾薬などの輸送の任務に当たった兵士。

.....
本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。